

今月の題字
木下明美さん

(みどり市大間々町)

赤城駅前の化粧品店『マルキン』を経営。どんな時でも明るく元気なお姐ちゃん。商店街のムードメーカー。先代のお父様からの長いお付き合いになります。

虹の架橋

検索

で、インターネットからでもご覧いただけます。

『戦争がもたらすもの』

日中戦争が始まる昭和十二年から太平洋戦争が終わる昭和二十年にかけて、みどり市からも多くの人が戦地へ向かいました。大間々町には特攻隊員養成を行う常陸教導飛行師団が昭和二十年に移駐しました。本展では、戦後八十年という節目を迎えるにあたり、戦争が人々に何をもたらしたか、みどり市に残された戦時期の資料から振り返ります。出征にかかわる資料として、臨時召集令状や千人針、奉公袋、出征の見送りに際して撮影された写真や家族に宛てた手紙などを紹介します。



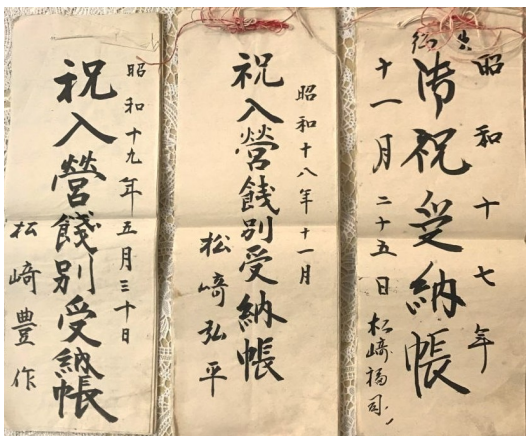
小耳にはさんだ いい話 (文責・菊) 《355》



『運を味方にする人の生き方』

さいたま市に住む友人から『運を味方にする人の生き方』という本を送っていただきました。この本は、一昨年の三月に開催されたWBCで三大会ぶりに世界一に輝いた侍ジャパンの名将・栗山英樹監督と鎌倉円覚寺管長の横田南嶺老師の対談で刊誌『致知』に掲載されて大きな反響を呼び、今年一月に単行本として発売になりました。栗山監督は「自分のことより人のため、チームのためにすべ

てを尽くせる選手をつくりたかった。強い組織というのは、全員がチームの目標を自分の目標と捉えていることだと思っています。そういうことを伝えるために、三十人の選手全員に墨筆で手紙を書きました。真心つてそういうものではないと伝わりたかった。栗山監督は、横田南嶺老師の著作はほとんど読み、円覚寺のSoudoなどでも南嶺老師の教えを学んできたそうです。栗山監督からの対談の申し入れに対し、南嶺老師は「野球に興味がなく、WBCなるものも知りませんでした。ので丁重にお断りしました。しか



世界一小さな
足利屋
トイレ美術館

今月の絵《355》

綾海さん『わたらせ夜空鉄道』



『吾輩は銅である』を編集した坂本寛明さんから『わたらせ夜空鉄道』という絵をお借りしました。アーティストの綾海さんは長崎県出身。キャンピングカーで旅をしながら地域の人々の想いに耳を傾け、その地域の『百年後の未来』を描いています。『わたらせ夜空鉄道』は足尾銅山の鉱石を使って描いた絵です。間藤駅で佇む列車と銀河鉄道のような列車が宇宙に向かっていくようにも見えます。綾海さんは「今自分たちがいるのは先代の人々のおかげであることを忘れないように生きたい」と書いています。足利屋で実物を是非ご覧ください。

いが出てしまふことを体感されたのでしよう。それがまた勝つて傲ることのない態度となるのだと思いたした」と書いていました。あとがきに、対談を読んだ南嶺老師のお母様が電話で「よく勉強したね」と褒めてくれたそうです。息子が野球には全く興味のなかったことをよく知っていたからでした。「還暦を迎えたものの、この対談のおかげで母からお褒めの言葉もらったのが私にとって最も嬉しいことでありました」と書いてあり感動しました。



靖ちゃん日記
令和七年二月九日(月)
日本を美しくする会の総会が東京新宿で開かれ、オプザーバーとして参加させてもらった。歴代会長や本部世話人、全国のブロック長が顔を揃えていた。会場のスクリーンには、今年一月二日に亡くなった日本を美しくする会の相談役・鎌山香三郎さんの遺体の写真が映し出されていた。鎌山さんは、自転車一台で行商から身を起こし、カー用品のイエローハットを築き上げた立派な人物だが、経営者というより求道者だった。『君看よ、双眼の色、語らざれば起るべきに似たり』という言葉が鎌山さんの姿と重なる。大間々の掃除の会も鎌山さんの指導で設立し、通算十二回、一年に三回も来てもらった年もあった。『世の中は澄むと濁るで大変だ。夕になる人か、夕になる人』という言葉がある。鎌山さんは「心の荒みを無くし、心はいつも澄んでいよう」と提唱していた。世間には心で澄んでいる人と心で濁っている人かいると思った。

